

中村俊定文庫
文庫 18
480



明和九年辰（改元安永十一月廿五日）序

茶の花見

石段の集段に
羽行脚つくは語
の記行の類はか
し別々木のほす
し
武蔵かつしかの取
籠庵霜好書

又海山集

くさく先海嶺波濤の行りかえり接書
取持るく是を生涯風箏の思ふ出さば
取持るく是を生涯風箏の思ふ出さば
風流を記きしらの園子有残一
居るの遊意先以世紙のまきりより
所持のまきり引合る是れ亦古士の
并は地るはあまじい
人の心骨折

みは吉田のりやうのあはれとて
中折なる志や一巻のりおは
めしとてよりし可然とて

一 姑予他は三十のりおのり
るやふ世の中へ玉一白也とて
あはれとてははしとて
今更しとてはとて
今更しとてはとて

一 姑紀りのりは先師もなまを
我名と別の名思ふは今も
つえをりしはとて
名の處とてはとて
のりお思ふはとて
かみしとて居しとて
一 遠國名江戸のりおのり
入感しとてはとて

可成小澤おほしるる由長志くまふ凡種
上のりてふ昔一かなしんふくまへ
出板のりておほしるるしやまよひ
下畧

壬辰のりて蓋冬日 相美山人



紀行

支那川

きぬ川よきくもやぬきを添上手 古黒史

とよく里川

そとよくと杭くも標らや川帯

川水とよまよくり出寸千鳥の風 杉サ乳

蛸飼川

桑丸木を今や藤葉のいとお川 史



川よりのあそびくもたう宮の錦
松葉

櫻川

木の葉くもよせぬうらな櫻川
叟

都たし北國へ

葉島やうん改皮をまんと花の上

権尾の葉^師の葉ま

たひ麻の布を求め

あつま^くや櫓ハ葉河乃柿下町

佛よと念衣^しくわら旅麻のぬ
松葉

此^のあま念佛をあらわす

北^証のまよ^らう^く鹿の^まの

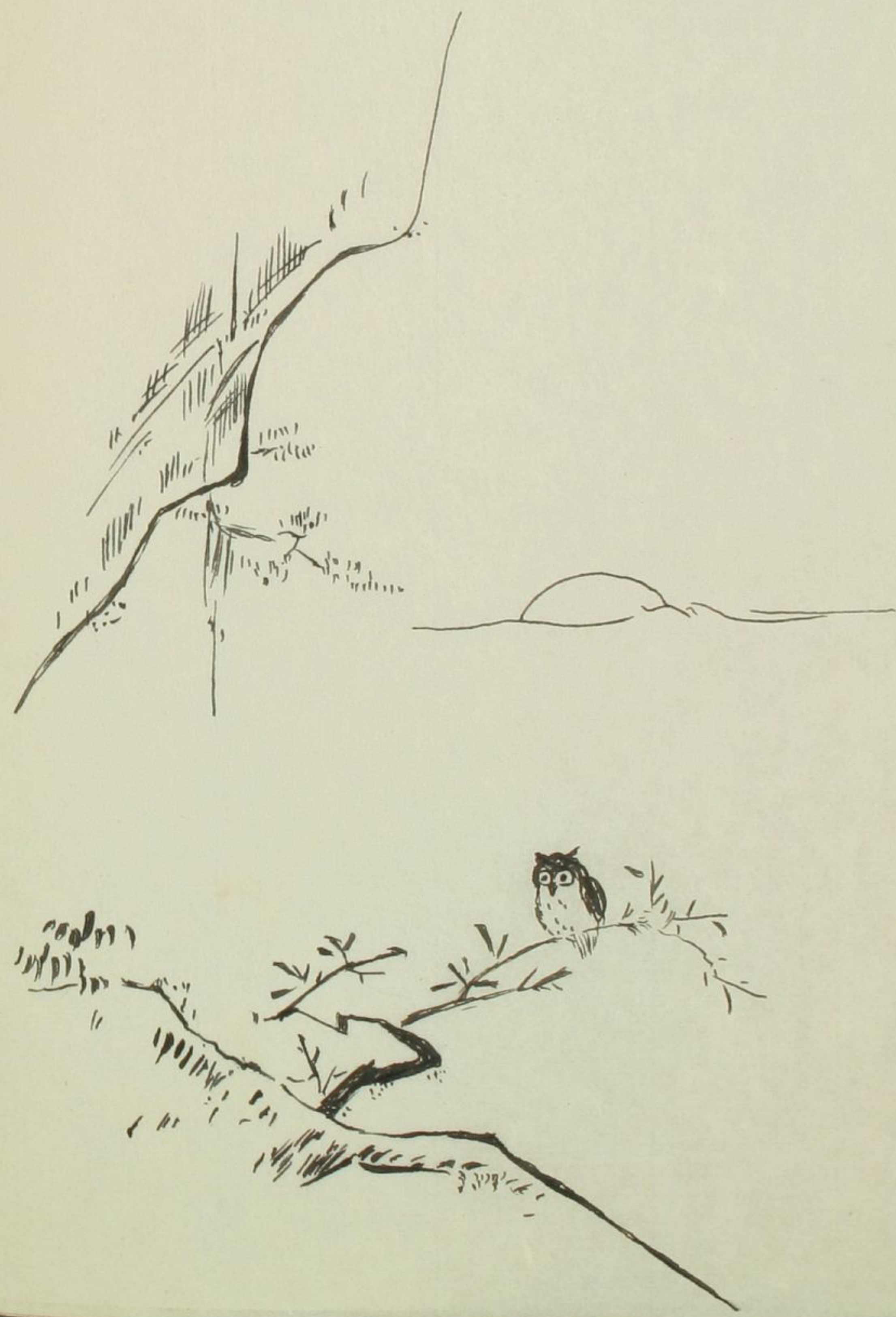
ゆへを^せせ

十^のおさ^くき^や野^あく^峰乃鹿
叟

登山^記付とあま^らま

這^の光^れ新^や岩^ま松^か津^良

山水を^及へ^たう^出す^水の^明
松葉



道は長崎の海行く思ひ一御山と

津なまのや藤下よくくさくさ杉田将隆と

やまの神い里坊より止まる其おもふ

吹いくつりまのふりくさくさ

木を免と頭中何い筑波山

皆を裸の木の石茶茶茶

お依衣嶽ハ曲突突と奇跡藤子持在

笑ハをく出乃芭芭ら出す

守黒史

巴州

松葉

玉朽

古酒とち すのれまありて雲の月

巳

京とすしふを名ふる海を

叟

稲はきこるに尻へい滴りてお

玉

長者とすまの夏る男とと

松

山川の内ハ火縄を巻めしれ

叟

十日とたけぬるひ紅あり

巳

鹿干とせよとの空者晴上季

松

娘と乃屏風し彩色

玉

らん歌と二方望みぬき久君花

巳

秋琴分限の具ゆの木食

叟

山書月と字しるすの所り年

玉

橋のあめと蛇のおより

松

松殿宣扇ハ花の筆も遊ひるす

叟

いわのと誘引女生の犯言

巳

床髪の暖心扇と赤尾と音信

松

高木のありき竹茂あさく

玉

飲子^口終^口中^口く^口所^口ま^口ぬ^口此^口を^口さ

巳

海^口の^口節^口ま^口よ^口け^口も^口あ^口の^口そ^口途^口

申

白^口壁^口の^口見^口竹^口滿^口る^口市^口中^口を^口尋^口

玉

夕^口日^口を^口掃^口ふ^口二^口階^口掃^口ふ^口ま

松

高^口き^口の^口装^口ゆ^口る^口ま^口え^口と^口和^口高^口様^口

申

三^口里^口く^口ら^口う^口ふ^口る^口川^口越^口

巳

此^口ま^口の^口花^口め^口ゆ^口り^口ま^口ぬ^口花^口

松

あ^口の^口子^口看^口ら^口ぬ^口親^口の^口啼^口

玉

湯^口あ^口ら^口の^口熱^口く^口ま^口る^口日^口所^口ま^口

巳

雁^口の^口い^口な^口の^口今^口春^口一^口舞^口

申

芦^口の^口穂^口は^口招^口め^口と^口ま^口る^口船^口

玉

世^口を^口廣^口袖^口は^口樂^口れ^口人^口ま^口り

松

隙^口を^口う^口り^口狸^口の^口啼^口を^口聞^口た^口う^口

申

あ^口の^口お^口合^口と^口見^口ゆ^口り^口燭^口臺^口

巳

花^口の^口木^口み^口星^口も^口こ^口よ^口ひ^口の^口笑^口あ^口り^口

松

柳^口の^口ま^口ま^口る^口川^口も^口燈^口檣^口

玉

竹録發句四季混合

江都

曲水やさの野の花と

鷗心亭

嘯れよ力持

白魚や滑りとを圓く ちくちくと少婦

琴書

字くりすゝ縫い少く昔り心やあやしき

柳子

携ふまゝくさるる子音やあ乃を

批人

涼しさを岩間の根毎吹起し

鷗川

字久日あふ水を論の陸のぬ

澹舟

その日や花の同し人あなま

女
山花

我瘦を鏡よ 鏡よ 袖下ぬ

花天

或あふはるあまのりきりきりさるあふ

九おん一

入日の影消のうたあふあ

柳絲

あふあふ時戻へ七折ぬ てを花あ

山民雪

字はむさひさあまの白一紙月
 花道
 清色君 代瓦や家まぐし
 利木
 嘯紙子禮 うき行運見抜
 朱雁
 飛この空星の男やあふる川
 平礎
 初雪や夏のあまのまきまき
 冬川
 白うき色うきおありまきの家
 呉船
 書繪繪子まゝふの楳と梅の花
 家人
 松竹のこほきかみかやあられ
 菊二

蓮の空丸いまもこれ一後の日
 百成
 云々や酔の夢のこを驚の
 了雲
 洛中を掃くはくはくはくは
 点花
 持まひか月を園中み岩の端
 義松
 都まゝに存るぬ秋やまゝまゝ
 也乙
 落く飛る風見付より柳一葉
 百柳
 小所まゝとて正奇の月
 標走
 波にけは 碎り流るる千鳥は
 裏人

雪老啼小梅見多梅木引
恙草子子様子麻子出子生子々子吟子修
折子ち子ま子や子ゆ子の子飛子ハ子寒子く子頃
節子々子の子井子角子と子法子の子巨子壺子外
朔子や子清子水子の子月子老子湧子足子す子
霜後

涼子さ子や子ま子と子り子廣子う子た子む子出子
賤子の子子子も子人子の子能子る子や子赤子ん子こ子る子
柳江

遊子ふ子の子白子や子隣子の子ぬ子花子と子り子
回子ふ子ふ子ハ子あ子ま子と子い子ぬ子暑子の子乳子
東志

ま子と子り子げ子捨子と子腹子る子や子聖子つ子と子ら子
花子お子と子法子と子字子の子や子麻子々子汁子
ま子ま子さ子く子花子ハ子言子る子り子ひ子ん子こ子る子
乳子費子ひ子ま子男子の子あ子く子田子拖子引子
雪子干子や子乳子ハ子涼子の子ま子あ子雛子
五明
柳子
系之
朴志
春志

日の入まゝの涼き静まりぬ

曰義

茶焙まゝ水鏡いとて猫の志

松戸長布

一由り庵 まき 一 障の序

下弦周也

夕風や脊戸うらむ 帰る

尾陽羅作

思ふやかくしの捨さる下

這子

八重 ま 梅等分の彼岸

芳杜

下より白ひよあそび新あやめん

根雪

海 ま ぬ山の澄月やおとす頃

一瓜

夕風は海 ま かくまを ま 出

海石

妻るや火より酒は及る 枯細工

菴阿

くくり ま や外のゆく ま 翠屋の月

乙何

半久 ま 日の ま 暮 ま や小世 ま 泉

未珠

花 ま 年の ま 目 ま さま ま 妻 ま の ま 泉

千泉

持下ろし松の日のさ霞中しるれ

波静

枝の葉の音のさや村の時

芝

藤さくわ 岸 うら花のさむし棚

百花

晴吟や偶ふ涼歌 芥川

雲詠

初原や日し庭子雲し居る

石相

狂言の花のさくさくあつた

何鳥

空あたる枝の蒼や梅の花

百之

釣あける魚のかしまる命 うれ

花明

障子に油うつら拂ふ落葉のぬ

百子

寒菊や葉の凍るぬき 登のさ海

川夢

今さうい 柳のまよ 峰の麻

秋瓜

名月や桂くと出くくさる名上

鳥明

鳥木と猿のあそびをさる鹿の静

松葉

夕の月や硯も持ぬ花を名に

古人 古珠

横子行ふも千尋尋や汐干 瀉

邦志

若子の年ハあくるも花 夢 外

白芝

武忍

燈車や砥水の澄ぬ大工小屋

長川

あそ風や氷も麦も吹流し

麦鈔

馬子おとちの浅くや鹿の跡

雁字

馬望の影入るあけ梅の花

義郎

見ゆるあけの星影一 懸月

蟻則

河の枝も葎多似る氷柱の風

里翠

橋よりおめえ渡すは岸外

富山 玉芥

映れ油の月影はこり細代さ

能代 寸洞

やし馬のあけのやうし猫の影

具推

梅出くや曾と葎宗の色は成

了常

菫の日ハ横つ子 浅くしり時を分

久保 桃溪

ささのあけの古むや苔の花

文櫻

言々やお乃の業入事なる会り

讃岐

畏天

里川の町をへさの茂の肌

之多

有引のまひまより千尋外

掛枝

元山へ春をよみたれしを

舞石

夕風や葉津の館を越ひ層

善山

喚語を語りまかり我を付か

長木

水争の枕か——や夕あ——

仙臺

東溟

物見ま神物なる

坊屋

意をいふ村にあうき 破可れ

去成岩

之徳

争りぬ木のうらも七花おふ

湯元

露中

新妻迷の隙の扉相や夕の花

鳥栖

一調

静子ふふは足しぬまらふや若手摘

記子

紀事

日まかすま物まい白しを此顔

新

不卒

白る水灘の浪踏踏やそ井坂

警角

ま里子の喰ぬ鳥摘む葦外

鳥不切

あまの日に啼き映る舞の時多

葦城

かくき家の娘 小 見きぬ名葉小

并二

夕立や横へぬくま康田の橋

女 凡

若飯や花をえらふよりの川

子鳳

昔あふのまを彩色きみり

寧固

美入れよりのりるきぬさ

太如

ハ朝や雨織るほり子刻り

梅舎

水鏡より伝屋 田白し小む千尋

桃牛

女房と不味方あり大根引

魚山

二河三河山並かゝる表しきさる

講 蘭石

鈴子あくやるるの野の谷かり

巴水

あ日やさうぬ 櫻と夜とすか

巴夢

裾那子とほむるああり芳菱の花

万 路泊

常陸國一連

動くまのりしむらじやわ子月白

水 江緑

いまちもまきく取まきく田植か

文江

宮の口や丸めきまらる一川橋

青洲

十^ハみ^ハこ^ハせ^ハや^ハ 留子の歌を踏てり
 かき^ハ可^ハ人^ハ 如^ハ扇^ハ取^ハり^ハ—青^ハあ^ハり^ハ—
 稲^ハ田^ハも^ハや^ハあ^ハ田^ハ川^ハ 稲^ハも^ハ走^ハる^ハ時^ハ
 岸^ハ 詠^ハも^ハ澄^ハみ^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハ香^ハ
 兼^ハ 年^ハと^ハく^ハと^ハの^ハ風^ハ見^ハや^ハあ^ハら^ハる^ハ
 川^ハ原^ハや^ハあ^ハら^ハる^ハ草^ハ木^ハ橋^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハ時^ハ
 居^ハ眠^ハも^ハ着^ハる^ハ被^ハた^ハら^ハる^ハ石^ハ可^ハら^ハぬ^ハ
 去^ハる^ハの^ハま^ハの^ハ夢^ハ—^ハあ^ハら^ハる^ハ茶^ハ摘^ハり^ハ
 芦^ハ桂^ハ
 遊^ハ之^ハ
 左^ハ右^ハ
 亀^ハ峰^ハ
 子^ハ牛^ハ
 小^ハ川^ハ 沙^ハ鷗^ハ
 蓬^ハ壺^ハ
 西^ハ五^ハ

休^ハむ^ハ時^ハ清^ハ水^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハ氷^ハ室^ハり^ハぬ^ハ
 福^ハ原^ハや^ハあ^ハら^ハる^ハ回^ハり^ハの^ハま^ハの^ハ夢^ハ
 毛^ハと^ハあ^ハら^ハる^ハか^ハき^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハの^ハ夢^ハ
 玄^ハ々^ハや^ハあ^ハら^ハる^ハ海^ハ原^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハ
 高^ハ々^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハ海^ハ原^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハ
 追^ハお^ハ—^ハあ^ハら^ハる^ハ一^ハお^ハら^ハる^ハ行^ハく^ハ子^ハ
 菊^ハも^ハあ^ハら^ハる^ハあ^ハら^ハる^ハの^ハま^ハの^ハ夢^ハ
 お^ハら^ハる^ハの^ハ棹^ハの^ハま^ハの^ハ夢^ハが^ハあ^ハら^ハる^ハの^ハ川^ハ
 妻^ハ久^ハ
 画^ハ江^ハ
 海^ハ原^ハ
 胡^ハ園^ハ
 仙^ハ枝^ハ
 粟^ハ戸^ハ
 伊^ハ霍^ハ
 藤^ハ秋^ハ

白露^露 白雲^露 也日^露 又む^露 可^露 時^露 子^露 色^露
 瓦^露 山^露 無^露 隣^露 又^露 晴^露 多^露 花^露 の^露 や^露
 斗^露 の^露 戸^露 の^露 羽^露 音^露 又^露 咽^露 く^露 や^露 終^露 子^露 の^露 夢^露
 鐘^露 の^露 子^露 以^露 遠^露 ち^露 見^露 は^露 暮^露 暮^露 暮^露 暮^露
 見^露 表^露 物^露 又^露 目^露 が^露 ぼ^露 う^露 川^露 明^露 り^露 の^露 月^露
 福^露 臨^露 也^露 多^露 山^露 の^露 月^露 の^露 暮^露 暮^露 暮^露
 生^露 提^露 桶^露 又^露 海^露 風^露 又^露 たく^露 氷^露 了^露 ぬ^露
 姨^露 捨^露 の^露 雲^露 又^露 も^露 空^露 又^露 夜^露 乃^露 露^露

露石 寔見水 巨江 本留 指月 得雨 其白 似水

釣^露 人^露 の^露 巢^露 又^露 一^露 て^露 通^露 小^露 舟^露 可^露 有^露
 岸^露 也^露 舟^露 の^露 竿^露 垂^露 又^露 又^露 行^露
 燈^露 又^露 舟^露 又^露 是^露 出^露 又^露 又^露 又^露 又^露
 難^露 民^露 又^露 又^露 又^露 又^露 又^露 又^露
 若^露 鮎^露 又^露 下^露 午^露 の^露 波^露 の^露 又^露 草^露 の^露 影^露
 泉^露 水^露 の^露 又^露 や^露 め^露 又^露 深^露 一^露 さ^露 又^露 又^露 雨^露
 深^露 又^露 又^露 又^露 又^露 又^露 又^露 又^露
 水^露 又^露 又^露 又^露 又^露 又^露 又^露 又^露

築道 可守 射人 成花 花言 仙舟 一志 重潮

厚やほきくさあさる川

谷子

言付くささるあなや納豆汁

石牛

月星よ中よあまや神よと

荷涼

さあしーさあ見る時や厚のさ

楓裏

神髓やむきと抱く見さあ行

奇音

書又よや通あしーささくささる

風吹

酒徳さあを飲さくやさのる

菽牛

るやの干腐さあさるあさる

来芥

よ川橋を井戸底を月見あは

宋立

さ蘇ぬひの荏ろるあなはふ

枝子

祇柱の寶くさあや冬、さあ

梅亭

一枝や花さるあなさる川橋

蝶夢

さあさあや硯をさああさる

諸丸

一輪ふらとさあさる梅亭あは

如之

陸帝 和毎乃園とヤシあう

中五

海風見子猫もいと先思葉は

新考

葉の花の香よいと人も

秋

腋まきう寝るれとまきり杜宇

木雞

物言ハ解えりやあまを言

如本

えはまや見ゆるゆま葉の花ハ花

李園

まの冬^まの意安あき節く

巨井

ふよハまの士^まの白いや菊の花

江卵

鐘撞て散るハ蜜や蓮の花

潮来 蕨徑

長閑さや草から續く海の色

磯洲

出嫌ひ^もあたる人^も多し菊の主

預如

煙きは岸ハまきり^もを

帆布

音のふ以時ハ枕や小あま

臥涼

折^もあまき^も捨てる木槿のれ

古仙

あまきり^もハ^も孫の^も小菊^も外

利水

あまきり^もや^もの^も峰^もあり山^もさ^も如^も野

陣回 素雅

小原めの髪見ぢりりや
 登りもふれはきつちや
 途おまの坂尋まふ
 焚けさす我も死なむ
 玄々のるまもいづれ
 飛小経の邦中をゆく
 雪のりか起しゆく

景山
 雀之
 孤仙
 双花
 清泉
 松下
 高嶺
 玉砂
 串引
 古遊

白のりか起しゆく
 儀のりか起しゆく
 雪のりか起しゆく
 新喜や花もあはれ
 扇さくやあはれ
 湯かきかへけり
 空梅や朝のつぼみ

延平
 市江
 仙流
 里風
 瓜夕
 燕舎
 鹿浦

花とるゝるの飛心む事可れ
 投細あゝ提く誘ふや夕す美
 山吹や涼き日くある帯の寺
 室より咽きと土着るあめ空に
 梅の香か思ひも秋の向くめ
 折る持もいととそし梅の花
 富もさり牡丹の花と子代の友
 降もきく涼きのたふを翁のれ

浮山
 延花
 五節
 細葉
 梅風
 系花
 不寂
 仙理

美節ぬゆりあゝあ花の山
 花はしゆ君あゝ新しし後の月
 挿ぬ日君陰屋も烟る千る外
 新厚やを細吹しきり持たう
 悉たしし枕君もとる本寒ひ
 念啼の隣 起き神一時き
 涙の降 浅間と裾の花吹か
 風や吹井へ落きり在の露

取上
 結里
 少補
 太執
 瓢石
 浮束
 五峰
 史薫

山里ハ人より多キ事アリ一のれ
 草一りりや女の聲を聞かたり
 水の流る所より流る花や赤れ
 大川に舟や舟の枯葉は散れ
 止社小祠も静まりけり
 おまの桃も咲きあり静まりけり
 半の暮や泣き声も雨とよむ時
 浪白くまきく波は是強き家外
 隠し

太田

芝六

古扇

芦竹

大灣

止甲

掉手

市中

隠し

去来つらき事啼や蛙の調子也
 一々々々人々々々怖き事也山外
 去来つらき事啼や蛙の調子也
 新束のなつうい葉屋の初まら
 葉屋の樹へはははははははは
 かああああああああああああ
 山くらのらららららららららら
 岩道の石をぬきぬきぬきぬきぬき

秋

一狐

瓜ッラ

雪丸

千古

喜却

地亨

松坡

河竹

砂月

若菜地や桑新みさの子鞠日と

文吹

船 船もあはる 酔ふ日ありあの鳥

清水 中更屋

あふ川と 櫻のあまの吹こを

那河川連 越砂

西日るや 岸のほ水しあふ会す

東車

遠く水と 岸の山ありあははる

南戸

と川あふあはる 山ありあははる

白好好

三原の 礫の流る日ありあは

几石

あふあはる 山ありあははる

杜由

あふあはる 山ありあははる

あふあはる 山ありあははる

あふあはる 山ありあははる

梅二

あふあはる 山ありあははる

江

あふあはる 山ありあははる

素綾

あふあはる 山ありあははる

古室

あふあはる 山ありあははる

知夢

あふあはる 山ありあははる

春浦

あふあはる 山ありあははる

得之

あふあはる 山ありあははる

巳勢

つゝの舞し流き 色もぬりぬ 吐や

正月の月まぬ 舞文やわのぬ摘 中保 旧芳

中啼や花莖の危地 はし 素相

麦の穂いまい 連や山さふ野 窓夕

改とちりく いぬ や川社 柳耳

留ららの腰のよ方 やしきあら 唇布

夕まきか や楫取 並す 三井の障 梅圃

桃さくや留の中ふ 向の右 梅玉

新むや節このよ 入の舞きたえこ 千滴

花見よハ 腰くはくらの 練たき 一松

野亭の 泣なきと 舞 松野原 赤直

高きあな かくも 晴新 節のれ 其舞

山いさく やちきく あらわと 長巻外 沂水

ゆいふあお 水な 鏡カ名 あり 舟 桃岸

あとの日 やあま ぬら い 木賣 紅霞

水降 い けし 甚く い なる 水 渭水

水もわたりく披す水の底

水

芥子の側 可くゆるるる

古阜

制札のまゝの花 花 花 花

花

五

才人 取 取 取 取

地

うさぎ 錦錦 ぬる 露 葉 葉

山

早 早 早 早

文

空の 空の 空の 空の

泥

斧 研 研 研

壺

白の や 飛 渡 川 船 の 橋

英泉

繫 糸 糸 糸 糸

鯨口

新 序 の 揃 女 女 女

此夕

白 白 白 白 白

女

如

松 見 の よ せ せ せ せ

琴吹

田 田 田 田 田

草也

日 日 日 日 日

狭花

ふり 帝帝 や 地 友 の 友

三花

あまのこゝろはなほなほ雪の川 解 夏海?

京のわかし山科春を冬より 辛 芽

牛の背の草を折る木槿 下 霜

あはれへの枕をさる暑 頂 雪

ふる河原人も喰ふり大根引 梅 二

取らぬ子 (一七) 咲る管 五 涼

涼さや樟のさしたき橋の上 春 縁

息抜く仲 乗 へま 三 徑

橋のいふも田舎や啼かば 春 涼

うら 市 琴

柏堂の指ふぬ 孤 鳴

是ほどの押 車 湖

右屋 買 風

此時更なる花の上の雪の下妻を
 ちと杖を曳かぬ時さうなると
 おもひ旅く世の廣くは此あま
 出る人か補吟せあるいあし
 とくは此山句をさるい中常陸
 の國の山門の中を徑圓の
 一 句一 歌をさしきゆるそり他
 一 書きしなまきりし流伝存まか



おどろぬ今うまありーらんあは
珠子其尾は流るるる

とどろちの~~田~~よ入る

宇野重

あふもや瓶波をいんと花乃上

さあよさあさむ里のうら

買風

牛よあ〜古りね買の目う利え

五雲

方川集をすゝ男たり

東湖

あん丸の月あは松も若ふりす

市中

涼きよゆをる音も机寒

松下

せの~~心~~の空はあ〜草かほ〜

踏洲

わ〜もろあ酒江戸の口解

越之

姐板の入る湯女の取よ来

奇芳

日ハ酒れう〜水くさひや

頂重

遠路の所〜とほ〜さあ

之花

氣あれの目ハ乳禱の第目

又江

夕々星の海つ川を心の月が成

左五

負の徳子編と晩稲を

五原

まきく行社とくそ氣師長友。友。

露之

是はうほく見ると時の巻基。基。

紀也

春の花咲きくるるハ晴あり

春終

供養の巻もあつた也

巻行

二 巻の巻もはなれり

史巻

我儘子と氣女の巻

梅二

ふん時のめつなハ心まより

山緑

提折亭松立表はこらと

宮夕

岩折とつとつと福は引と

函峰

おきと表をこらとよす

表何

毛纏の目よハは夏の初山

名山

飯立まよりさ入沈振舞

大如

柴柴を焚く巻とつとつと

池鏡

今後川とつとつと

太歌

松の葉はまふふとくくとおの月

只白

湯まはりのぬま年く

万治

りふしうと大和浴ハ皆掃蓮

芝六

力止せと 新一人も来

細葉

酒序（花）あふせくはる飯亭

景山

入りし 念々赤の模り

花如

己身おこし 林下の花ハ之也と

吉部

味ハ 新しとおしころの書

掉雪

葉花見序

下総の園籬庭色草お打とて教人の

武江をまはるの門は入るといふお君

風物とておむる自あり予とて

おあつりは来すもの侍りては人と

決りある時 居士の瓶はもつとて

おる飯亭と見えたる 玉柄ハ居士乃

ちておのよみしころ 人ころハ心ハ

安永元年
五月

とすま子 柯曾々 許さす ぬくは 徳く
 此樂ニニ 扱を 寫し 得たり 其後予
 かはしる之 解庵の 今の 松籟庵の
 けふの 居士の 門は 入る 留し 其
 二指士 世を あり あり 二十 余年
 生 自ら 其を あり 八之 十 余年 其
 予は 古稀の 歎を 述し 病む
 心 こと 期を あり 心

あも 世を 生涯 一集を あり 其頃
 むし 此の 回 卯 日 人の 入る 是 時
 是 居士の 名 家と 承く 其 あり 九
 趣 意を 松籟 庵の あり 其
 入る あり 其 あり 其 あり 其
 入る あり 其 あり 其 あり 其
 入る あり 其 あり 其 あり 其
 入る あり 其 あり 其 あり 其

之録をよと奪ふく梓よ奪く是と
 止むるは奪きの力足るを却然と
 筆を操る那阿のみ所との系を
 庵よおみそ買風流と



昭和十四年八月二十日寫了
 急本水口氏藏

俊彦

(Faint, mostly illegible handwritten text in blue ink, possibly bleed-through or a separate note.)



